II　内容分析

受け手調査の結果、市民の警察に対するイメージ形成には、メディア———特にテレビが大きな役割を果たしていることが明らかになった。そこでテレビドラマに登場する警察官のキャラクターを分析し、その特徴を把握することによって、メディアに描かれた警察官が市民の警察イメージ形成にどのような影響をおよぼしているか、さらに詳しく明らかにしようと試みた。

1.方法

(1)分析対象

受け手調査の結果多くの人の印象に残っていたテレビドラマ番組を選び、そこに登場する警官キャラクターのうち氏名が判明するもの、計６７名を分析対象とした。内訳は、男性主役級１２名、男性脇役３５名、女性主役級９名、女性脇役１１名である。

なお、分析対象番組は図表２－２－１に示した。

(2)方法

受け手調査の結果を参考に選出したテレビドラマの一話分をＶＴＲに録画し（ただし、過去に放送されたものに関してはレンタルビデオを利用した）、コード表（巻末：資料参照）にもとづいて登場人物の行動やパーソナリティをコード化する。分析にあたっては、コーダーの個人差によるイメージ評定の偏りをなるべく避けるため、事前にトレーニングをうけた大学生が二人一組で作業にあたった。二人のコーダーの意見が別れた場合には、

よく話し合い不一致点を解消した上でコードするよう指導した。

なお分析対象数が６７名と少ないため、結果の解釈においては、コード化した数値を参考にしながら、全部の番組を視聴した筆者の恣意的な判断と併せて、総合的に検討を加えた。

番組名	Ｃｈ
踊る大捜査線	フジ
あぶない刑事	日本
はぐれ刑事純情派	朝日
古畑任三郎	フジ
はみだし刑事情熱系	朝日
ケイゾク	ＴＢＳ
ママチャリ刑事	ＴＢＳ
きらきらひかる	フジ
ボーダー	日本
逮捕しちゃうぞ	ＴＢＳ

図表２－２－１　　分析番組一覧

2．結果の概要

(1) 登場人物の属性

登場人物の性、年令構成は、図表２－２－２のとおりである。

男女の比率は女性３割、男性７割であった。この比率は日本のテレビドラマにおける登場人物全体の男女比とはほぼ同じだが、現実の警察における男女比よりはやや女性の比率が高いのではないだろうか。こうしたテレビと現実とのギャップが、視聴者の警察官の男女比のイメージに影響をあたえ、視聴者の警察官の男女構成比に対するイメージがテレビよりに偏っている可能性もある。そこで第１部の市民調査の結果と照らし合わせてみると、この数値は視聴者の現実イメージ（女性１：男性９）より、むしろ理想とする比率（女性３：男性７）の最頻値に近いことがわかった。テレビの世界が現実に一歩先んじて視聴者の理想を表現しているのか、あるいは視聴者の方がテレビ世界に近い理想像を形成しているのか———ふた通りの解釈が可能だが、いずれにしろ注目に値する。また、数少ないながら女性管理職も登場しており、テレビの描く警察では、少なくとも数の上では現実に先んじて、女性警察官の進出が進んでいる。

もう一つ重要な点は、男女別の年令比である。登場人物を２０代の若者と３０才以上の中年に分類すると、女性は４分の３が若者であるのに対し、男性は中年が７割と圧倒的に多い。男性は仕事上の充実期である中年が多いのに対し、女性は若さと外見が重視される偏った価値観が、こうした点に反映されていると考えられる。

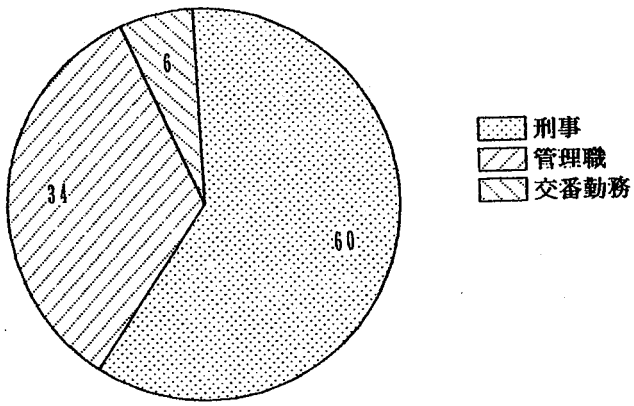
また男性キャラクターと女性キャラクターを比較すると、前にも述べたように、男性の方が、放送（放映、出版）時期、人種、年令など様々な面で、多様性に富んでいることも改めて指摘しておきたい。ただし警察内部の職種は、男性の場合刑事———しかも殺人事

件の捜査にあたる刑事（６０％）か管理職（３４％）がほとんどで、交番勤務や少年課、交通課など事件捜査以外の仕事に携わる警察官が登場する例はきわめて少ない。テレビでは、「刑事」が花形職種として偏重されている傾向が、はっきり見てとれる（図表２－２－３）。

一方女性キャラクターが警察内で担わされている仕事は、刑事をはじめプロファイラーなどの専門職、交通課、少年課から、署内の受付け、事務、お茶汲みまで多岐にわたっているのが特徴である。

	２０代	３０代～
男性 (n)	１４	３３
%	３０	７０
女性 (n)	１５	５
%	７５	２５

図表２－２－２　登場人物の性別・年令構成



図表２－２－３　男性登場人物の職種

(2) 仕事ぶりに対するイメージ

キャラクターの上司、部下との関係や仕事に対する価値観を分析した。結果は、図2－2－4～6に示したとおりである。

注目すべきなのは、特に男性の主役級キャラクターの中に、上司に反抗的だったり（58％）、組織より自分の考え方を重視する（83％）アウトロータイプが多い点である。同じ男性でも脇役では組織重視の仕事観を持つ者が8割をしめており、対照的な傾向をしめしている。

女性の主要キャラクターは必ずしもこうしたアウトロータイプばかりとはいえず、上司や組織に順応しているタイプが多い。しかし部下に対しては命令型の強い態度で接するキャラクターが多いのが特徴で、年下の男性部下を顎で使って捜査する男まさりの刑事が、女性刑事のひとつのプロトタイプとなっている。このようなキャラクターが多いのは、受け手調査のイメージ分析で明らかになったような「非女性的」イメージを伝えようとするためだと推測される。

脇役キャラクターの中でも、管理職のキャラクターには特徴的な傾向がみられる。図表2－2－7に見られるように、管理職キャラクターには、上司にはへつらう一方、部下には高圧的という典型的な「裏表」タイプが数多く見受けられる。受け手調査にみられた警察の「二面的」イメージは、主役級ではなくむしろこうした脇役によって形成されている可能性が強い。

(%)

	へつらい	従順	対等	反抗	不明
男性主役	8	8	17	58	8
女性主役	0	44	0	56	0
男女脇役	51	11	4	16	22

図表２－２－４　上司に対する態度

(%)

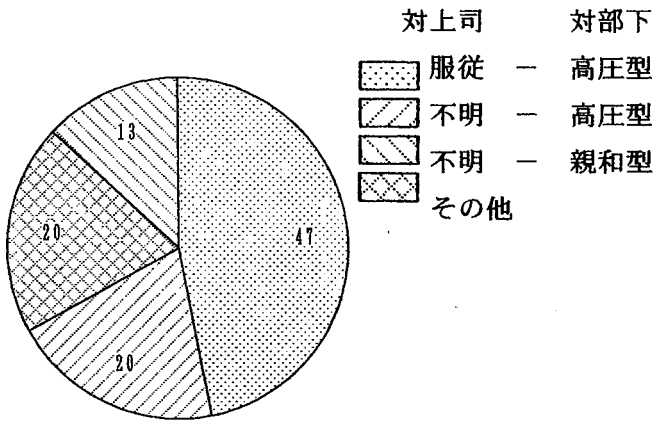
	高圧	受容	対等	放任	不明
男性主役	33	33	17	58	8
女性主役	33	33	0	17	8
男女脇役	36	16	4	4	38

図表２－２－５　部下に対する態度

(%)

	個人行動	組織重視
男性主役	83	17
女性主役	67	33
男女脇役	20	77

図表２－２－６　　仕事のし方



図表２－２－７　管理職キャラクターの仕事ぶり

(3) 警察官のキャラクターのイメージ

警察官のイメージについては、１５の形容詞対を用いて各４点法で評価させた。その結果を属性別に集計し平均値を示したのが、 図表２－２－８である。

主役級の男性キャラクターの特徴をとらえると、「かっこよく」て「明るく」、「公正」だが、やや「感情的」というタイプの警官像が浮かび上がる。全般的には、「太陽にほえろ」や「大都会」といった一世代前の刑事物によくみられた、男っぽく地味でストイックなタイプの刑事は減少し、軽妙洒脱で人当たりがよく明るいキャラクターが増えている印象をうける。かつて刑事ドラマにつきものであった警官による暴力も最近ではすっかり影をひそめ、推理や地道な捜査など知的な作業を通じて事件を真相をつきとめるキャラクターが多いのも特徴である（表２－２－９）。ただし、単に明るくソフトだけでは不十分らしく、多くのキャラクターはいざとなれば危険を顧みず命懸けで市民を守ってくれる「強く頼れる存在」でもある。このように主役級、特に男性の主役は、柔剛おりまぜた理想のキャラクターとして描かれている者が多い。

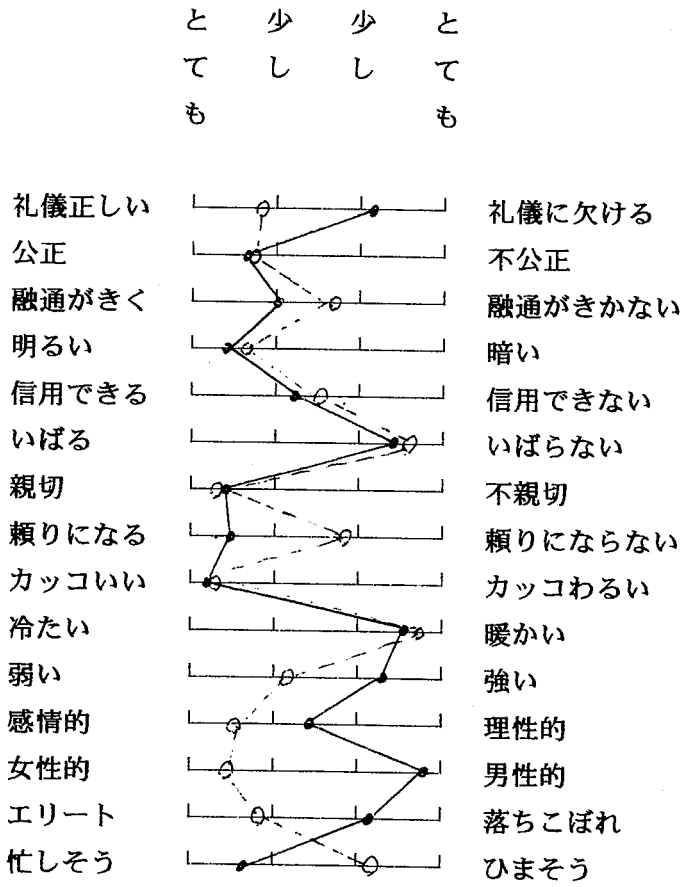
女性キャラクターのイメージの特徴は、「礼儀正しく」「カッコいい」がやや「融通がきかない」ことである。また外見的魅力、言い換えれば性的魅力を売り物にするキャラクター・イメージが多くみられるのも、女性に特有の傾向である。たとえば分析対象となった「逮捕しちゃうぞ」というアニメでは、女性警察官がわざと制服の胸の部分をはだけたりスカート丈を短く切って肌を露出し、男性職員の気を引くシーンもある。男性視聴者の好みにあわせたキャラクターをデザインした結果ではないだろうか。

その一方で極端に男性的で気が強いタイプも、よく見られる。こうしたタイプのキャラクターの多くは「融通がきかず」、「やさしさ」「柔軟性」といった伝統的な女性イメージを感じさせない点も特徴的である。

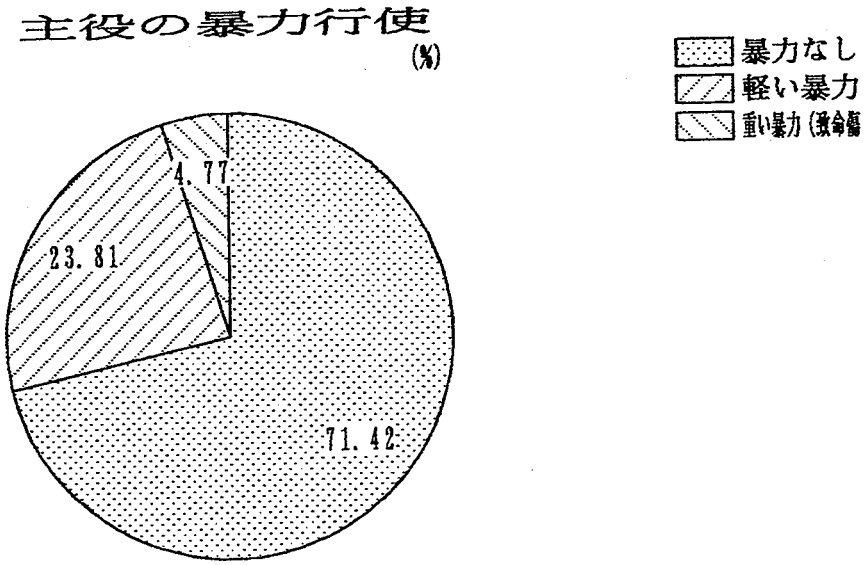
それでは脇役系のキャラクターのイメージはどうであろうか。

前述のように、脇役、中でも管理職のキャラクターには独特のイメージがある。特に「いばる」「暇そう」といったイメージが強い点は特徴的である。

図表２－２－８　警察官のキャラクターのイメージ



図表２－２－９



3．考察

上記の結果を総合すると、興味深い点が明らかになる。受け手調査の結果、市民の一部に現実の警察官の仕事ぶりとは必ずしも一致しない「怠惰」「二面性」といったイメージが存在することが明らかになった。こうしたイメージの起源のひとつと考えられるテレビドラマのキャラクターを分析した結果、主役級のキャラクターは理想的な警官がほとんどで、このようなイメージにつながる要素はみられなかった。ところが脇役、特に管理職のキャラクターだけを抽出して分析すると、「強きになびき、弱きを挫く」あるいは部下が忙しく働いている間に接待ゴルフや飲酒に興じるなど「暇そう」なイメージは浮かびあがっている。

そこであらためて主役級のキャラクターと脇役キャラクターの描かれ方を概観してみると、主役（特に男性）は、人間としては魅力的だが、警察組織の中には順応していないアウトロータイプとして描かれている場合が多い。視聴者があらかじめもっている「現実はテレビの世界ほどうまくいかない」という現実感覚も重なって、こうした理想的警官像は「お伽話の例外」として認識され、市民の警察イメージ形成には影響を与えにくいのだと考えられる。一方理想的イメージの主役の影になり一見印象は薄いものの、脇役は欠点をかねそなえた人間的な存在として描かれているため、視聴者もこちらの方が現実に近いイメージととらえる。そのため、怠惰で二面性をもつという脇役のイメージが、「もっともらしい」警官イメージとされてしまうのではないだろうか。そうだとすれば、視聴者に脇役キャラクターこそ本物の警官そのものイメージだと誤解する人がいても、不思議はないと考えられる。

以上のように、メディアの警察官のイメージは複雑なプロセスをへて、視聴者のイメージ形成に影響をおよぼしている。こうした歪んだイメージの影響を認識した上で、市民に正しくかつ肯定的な警官イメージを形成させるためには、直接接触におけるよりよい体験

の機会を増やすこと、そして警察全体が情報公開につとめ、より開かれた組織になるよう努力することが必要であろう。